

成長マインドセットの視点を取り入れた学級経営の在り方

松島 広典・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

成長マインドセットの視点を取り入れた学級経営の在り方[†]

松島 広典*・司城紀代美**

茂木町立茂木小学校*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

本研究は児童の「粘り強さ」を育むために、「人間の基本的資質は努力しだいで伸ばすことができる」と考える「成長マインドセット (growth mindset)」に着目して学級経営の在り方について検討したものである。「成長マインドセット」の視点から児童への学習過程に対するフィードバックを継続して行うことで、担任教師自身が「成長マインドセット」をもって学級経営を行うことができることが明らかになった。それによって学級の児童も変容していくと考えられる。一方で、努力と結果が結びつかないことが長期的に繰り返された場合、児童は「成長マインドセット」をもつことが難しくなる。多様なフィードバックの方法を検討することが必要である。

キーワード：学級経営 粘り強さ 成長マインドセット

1. 問題と目的

今般の学習指導要領改訂では、各教科等の目標等を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱で再整理した。観点別学習状況の評価についても、これらの資質・能力に関する「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理した。

また、国立教育政策研究所 (2020) は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、次のように示している。

- ① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面
- ② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

という二つの側面から評価することが求められる。

「粘り強さ」は、日常的に使用される言葉であるが故にその判断基準が人によって異なる。本研究では、この「粘り強さ」につながる視点として「マインドセット」(ドゥエック, 2016) に着目した。

マインドセットは、「人間の基本的資質は努力しだいで伸ばすことができる」と考えるしなやかマインドセット (growth mindset) と、「人間の基本的資質は固定的で変わらない」と考える硬直マインドセット (fixed mindset) で構成されている。

しなやかマインドセットは、成長マインドセット、増大的知能観、成長的知能観、成長的思考態度、拡張的知能観、増大的知性感、増加的知能観、成長思考など複数の日本語訳があり、硬直マインドセットは、固定的マインドセット、実体的知能観、固定的知能観、固定的思考態度、固定的知性感、固定思考などとよばれている。本研究では、growth mindset を成長マインドセット、fixed mindset を固定マインドセットとした (以下、成長マインドセット、固定マインドセットという表記で統一する)。

本研究では、「成長マインドセット」の視点から「粘り強さ」を育むための学級経営について検討した。

[†] Hironori MATSUSHIMA*, Kiyomi SHIJO**:
Classroom Management with a Growth
Mindset Perspective
Keywords: Classroom Management,
Mindset, persistence

* Motegi Elementary School

** Graduate School of Education, Utsunomiya
University
(連絡先: shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

2. 実践の概要

(1) 担任教師の願いと学級内での取り組み

研究協力者は小学校4年生の1学級（以下、対象学級）と学級担任の教師である。研究のはじめに、担任教師へのインタビューを1時間程度行った。そこで担任教師は、「前向きな気持ちで成長してほしい」、「人（友だち）を大切にしてほしい」という2つの願いを学級経営の中心に据えていることが分かった。次の①～③は、担任教師へのインタビューから分かった担任教師の願いに基づいた学級内での主な取り組みである。

①学級目標の作成

年度初めに「みんなで学ぶ！ みんなから学ぶ！ 成長楽しむ 4年〇組」という学級目標を立て、掲示物を作成した。学級目標の周囲に掲示されているのは個々の目標で、「やればできる」や「ポジティブまんたん」などの前向きな言葉が見られる。また学級目標では、「成長」をキーワードとし、折に触れ児童自身の成長を振り返るような学習活動を行っていた。

②ポジティブな見方・考え方の育成

担任教師は対象学級の児童に自分の能力を否定するような発言が多くあることを気にしていた。また人間関係上のトラブルや問題行動等も少なくない。担任教師はそれらの背景として、児童の努力が認められていなかったり、受け入れられていなかったりすることが要因ではないかと推察していた。こうした学級内の雰囲気や児童の意識を担任教師は感じ取り、「子供たちが前向きに学校生活を送れるように」という願いを込め、2学期の初めに「～たい」、「トライアンドエラー」、「発想の転換」などのポジティブな言葉を伝えた。それぞれの言葉に込められた意味は次の通りである。

- ・「～たい」という言葉を多用してやる気を促す。
- ・トライアンドエラーを意識してやってみる。
- ・「つまらない」から「おもしろい」に発想を変える。

また、話し合い活動の中でも、「みんなで話し合い ポジティブな言葉を使おう」という合言葉を決めた。

③コトダマワーク

「人（友だち）を大切にしてほしい」という願いから、毎日、帰りの会でコトダマワークという取り組みを行っている。例えば、「友だちにありがとう」というテーマでは、あらかじめ決められた相手（友

だち）に感謝の言葉を付箋に綴り、グループで共有した上で友だちに渡すようにした。特に指示はなかったが、児童同士で交換した付箋は、児童自身の机上や自主学習帳の裏表紙などに貼られていた。付箋を大切にしたいという気持ちが表れているととらえられる。

筆者は、担任教師の願いに基づいた学級内での取り組みを知り、担任教師と連携しながら学級経営の一助となるよう、まず児童を対象とした「成長マインドセット」「自己効力感」「根気度と失敗に対する態度」に関連する質問紙調査を行うこととした。

(2) 質問紙調査の結果より

学級内の児童全員が「成長マインドセット」をもつ傾向がみられた。その背景として、対象学級の担任教師による2つの願いに基づいた学級内での取り組みによる影響が考えられる。

また、「成長マインドセット」と「自己効力感」、「根気度と失敗に対する態度」の学級平均において差が見られた。その要因として、児童が自分自身の学習に対する粘り強さに気付いていないことが予想される。このことから、児童が自分自身の粘り強さに気付いたり、自己効力感を高めたりするような実践として、学級通信を発行することとした。

(3) 学級通信の発行

児童の努力を受け入れ認める働きかけを行うため、学級担任と筆者で協力して、「SMSだより（成長マインドセットだより）」と名付けた学級通信を発行した。学級通信では、主に児童の学習過程（どんな方法で、どのように取り組み、どんな選択をしたか）に対するフィードバックを行うこととした。通信を採用した理由は、文字や画像として教室に残ることで、いつでも努力している児童の様子を振り返ったり、確認したりすることができるからである。

1号あたりA4で1枚から2枚の文章量で、通算22号発行した。学級通信は、対象学級の担任教師が口頭で読み上げた後、学級内の背面黒板に掲示した。

児童がもつ学級通信に対する印象を明らかにするために、質問紙調査も実施した。教室の背面黒板に掲示されている学級通信への興味関心を調査するため、「毎回読んでいた」「たまに読んでいた」「あまり読んでいなかった」「全く読んでいなかった」の4件法で調査した。結果は以下の通りである。

毎回読んでいた 10名

たまに読んでいた 10名

あまり読んでいなかった 1名

全く読んでいなかった 1名

以上の結果から、多くの児童は掲示されている学級通信に興味関心があることがうかがえる。また、学級通信に掲載された印象について、以下のような回答を得た。

- ・うれしかった。
- ・少しうれしかった。
- ・すごいと思った。
- ・まあまあいいと思った。
- ・もっとがんばって（努力）むずかしい問題をとけるようにしたい。
- ・もう一回とってもらおうと思った。
- ・私のことを見てくれたのか、という安心。不安がなくなった。
- ・〇〇先生は人のいいところを見付けるのが本当に上手なんだと思った。
- ・努力をしているんだと自信がもてるようになった。
- ・私も成長しているからのって思う。だからこれからももっと成長したいです。
- ・うれしくなかった。
- ・みんなにみられてちょっとはずかしい。

「私のこと見てくれた」「努力をしているんだと自信がもてるようになった」など、肯定的な回答が多かった。

通信は記録に残るためいつでも読み返すことができる良さがあり、概ね肯定的に児童に受け止められていることが分かった。ただし、一部の児童にとっては否定的な感情を抱かせる可能性があるため、細やかな配慮が求められる。

併せて対象学級の担任教師へのインタビューも行った。担任教師からは以下のような発言があった。

- ・児童が粘り強く努力している姿を見取って、それをしっかりと児童に伝えることが大事だと実感している。
- ・児童の学習の結果よりも過程に着目することで私（担任教師）が成長マインドセットをもった。そうすると、「この子はもう伸びない」ではなく、「みんな無限の可能性をもっている」という気持ちが強くなった。だから、「どうしたら子供の学習過程が充実するだろうか」と自分の授業や指導を見直すなど、子供の成長を願う気持ちが

が強くなる。

- ・ほめるとは価値を伝えることだと思う。自分も粘り強さの視点を意識するようになった。
- ・児童は、学習の過程を認めたりほめたりすれば、たとえテストの点数が満足いく結果ではなかったとしてもあきらめずに努力するようになった。
- ・「頭が悪い」「この班は僕以外みんな頭がいい」などと、自分のことを否定するかのような言動が減ってきた。ゼロにはならないが、かなり減っているように感じている。また、友達の能力を否定するような発言はほぼなくなった。

これら学級担任の発言から、学習過程に対してフィードバックを行うことで、児童の学習に対する粘り強さを促したり、児童が自他の能力を否定しなくなったりすることにつながるものと推察する。

(3) 児童の変容

12月に「成長マインドセット」等に関する質問紙調査を再度行った。2回の質問紙の数値の変化と児童の様子の変化をあわせて考察する。ここでは、7名の児童について取り上げる。

①質問紙の数値が上昇したA児

担任教師から「最近Aさんは頑張っているね」と声を掛けられている場面が見られた。その後、筆者が「頑張っているんだね」と声を掛けると、「おれ、最近頑張ってるんだ」と答えた。また、10月頃は教師に促されてもテスト直しに取り組まなかったこともあったが、12月頃になると自主的に赤鉛筆でテスト直しをするようになった。

②質問紙の数値が上昇したB児

10月頃、授業中にふらっと図書室に行くことが多かったが、12月はそうした行動はほとんど見られなくなった。授業中に授業とは無関係な本を読んでいたこともあったが、自席に座っている時間が増えた。

③A児とB児に関する担任教師の語り

- ・A児、B児ともに1学期は学習に意欲的でなかったが、今（12月）は学習にかかわり続けるようになった。明らかに学習につながる時間が長くなった。また、表情が明るくなった。
- ・A児は1学期は授業に集中することができない様子が見られたが、2学期には授業中に鋭い発言があった。教師や友達の発言を聞くようになったからだろう。

・1学期に比べ、ずっと人間関係が良くなった。友達と関わることで明るくなった。テスト直しも自分で解決できないときは友達に解き方を聞くようになった。

・B児は以前は授業中に図書室へ行ってしまったことがあったが、12月頃にはほぼ教室にいるようになった。授業中、授業とは関係のない読書をしていることもあるが、自分の座席に座ってられるようになった。やり方が分かればやるようになった。

A児、B児は初回の質問紙調査では学級内ではやや固定マインドセットをもっていた児童である。マインドセットが成長マインドセットに変わることで自己効力感が高まり、学習に対する粘り強さを促したのではないかと考えられる。

④数値が変化しなかったC児

全体の数値は変化しなかったが、2回目の質問紙調査で「新しいことを学んだら、もとの知能（頭のよさ）も変わると思う」「その気になれば、授業の内容はほとんど理解できると思う」の2つの質問項目で数値の低下がみられた。これらのことから、C児の学習の定着に対する不安が読み取れる。担任教師のインタビューで、「Cさんは学習に対して非常に粘り強い児童です。難しい問題でもあきらめることなく取り組んでいます。でも、テストの点数は自分が思っていたほど上がらなかったと感じているのかもしれないね」との発言があった。

⑤数値が低下したD児、E児、F児、G児

数値が低下した児童は4名いた。このことについて担任教師は、「Dさんは人間関係や自分の内面のことで悩みを抱えています。そのことが数値に表れたのかもしれない。Dさん以外の3人は、質問紙を実施する直前に返却した社会のテストの影響かもしれない。きっと、頑張ったけど点数が思ったよりも良くなかったことが原因だと思います」と回答した。

努力量に対して結果が伴わなかったと児童自身が判断したこと、マインドセットに関する知識を得たことで児童自身が自分に対する認識を深めたことが、数値の低下の要因として考えられる。

ただし、担任教師が、「3人は頑張っている」と述べるように、E児、F児、G児の学習に対する粘り強さや主体的に学習に取り組む態度は向上していると考えられる。

時間をかけて学級全体で取り組みながら個々の変容をとらえることが重要であるといえる。

3. 考察

対象学級の担任教師へのインタビューから、児童への学習過程に対するフィードバックを継続して行うことで、担任教師自身が成長マインドセットをもつことにつながる可能性があることが明らかとなった。担任が「成長マインドセット」をもって学級経営を行うことで、子供たちも変容していくと考えられる。一方で、努力と結果が結びつかないことが長期的に繰り返された場合、児童は「成長マインドセット」をもつことが難しくなる。多様なフィードバックの方法を検討することが必要である。

学級通信による学習過程に対するフィードバックへの児童の感想から、学級通信による学習過程に対するフィードバックに対して肯定的な意見が多くあることが分かった。しかし、学級通信に掲載されることに抵抗を感じる児童もいるため、細やかな配慮が求められる。

文献

国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料[小学校国語]』、東洋館出版社。

キャロル・S・ドゥエック（2016）『マインドセット「やればできる！」の研究』、草思社。

令和4年4月1日 受理

Classroom Management with a Growth Mindset Perspective

Hironori MATSUSHIMA, Kiyomi SHIJO